

むかし、あるところに、平作へいさくという貧乏なお百姓がいました。いくら働いても、暮らしは楽になりませんでした。しまいに、あきらめて、家の中で寝てばかりいました。平作がこんなふうだから、おかみさんも、はりあいがなくて、ほうき一本手にすることがなく、家の中はいつもほこりだらけでした。

あるとき、平作が、おいしいを開けてみたら、がらくたの上に小さなやせたじいさんがすわっていました。

「おい、おい。おまえ、だれだ」と、平作が聞くと、

「おれは、貧乏神だ。おまえの家があんまり好きなので、半年も前からやつかいになっている」といいました。平作は、びつくりしました。

「おれのうちが貧乏なもの、この貧乏神のせいだな」

平作は、腕組うでぐみして一日じゅう考えました。そして、その晩ばん、こっそりおかみさんにいいました。

「あんな貧乏神におられては、貧乏するのもあたりまえだ。どうしよう」

「明日の朝早く引越こしてしまおう」

ふたりでこそそ相談していたら、おいしいの中で、がさが音がしました。なんだろうと思って、おいしいを開けてみると、貧乏神がわらぐつを作っていました。平作が、

「おまえ、そんなもの作ってどうするんだ」ときくと、貧乏神は、

「おまえたちが、引越ひしするから、おれも、明日の朝までにわらぐつを作って、いっしょに行こうと思ってな」といいました。平作は、それを聞くとがっかりして、おかみさんに、

「この貧乏神は、おれの行くところならばどこでもいっしょに行くようだ。それなら、どこへ行っても、いいことはない。いっそのこと、どこにも行かないでここにしようか」といいました。おかみさんは、

「そうだね。どうせ同じ苦労くろうするなら、ここでうんと心を入れかえて働くことにしようか」といいました。

「そうだな」

それから、ふたりは、生まれ変わったように、朝は暗いうちから、夜はお月さまが

出るまで、働きました。

貧乏神は、

「これじゃ、おれがどこかへ行かねばならん」といつて、平作たちの知らないうちにいなくなったとさ。

どんどはらい

村上郁再話

資料『にのへ三戸の昔話』菊池勇